

一般国道 158 号(松本波田道路)改築工事に伴う発掘調査

しんこうじいせき

真光寺遺跡 現地説明会 資料

令和 6 (2024) 年 7 月 20 日 (土)

(一財) 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター



真光寺遺跡遠景（令和 5 年 11 月 東から） ※黄線：溝跡（SD30）

1 遺跡の概要

真光寺遺跡は梓川右岸の河岸段丘上に立地します。遺跡の東方には安塚古墳群と秋葉原古墳群が分布し、遺跡の範囲内には弘治3(1557)年に再興されたと伝わる真光寺が所在しています。

一般国道 158 号(松本波田道路)改築工事に伴い、当センターが令和3(2021)年度から発掘調査を実施し、昨年度までの調査では、7世紀後半から8世紀初頭に築造された古墳2基(SM01・02)、中世以降の火葬施設跡や土葬墓、竪穴状遺構、溝跡、柵跡、土坑などの遺構を確認しました。

本年度は、昨年度の調査区から続く中世の溝跡や、中世以降の竪穴状遺構 10 基、溝跡9条、土坑約 200 基(掘立柱建物の柱穴を含む)、焼土跡2基などの調査を行っています。

2 方形に巡る中世の溝跡

調査区の北側でみつかった溝跡(SD30)は幅約2m、深さ 0.3～0.6mで、断面形は逆台形となります。この溝跡は和田堰沿いに東西方向に延びたあと南方向へ向きを変え、さらに現真光寺(お堂)の北東部で西方向へ曲がりまゝす。西端と南端は調査区外に延びるため全容はわかりませんが、方形に巡ることが予想でき、一定の範囲を区画するための溝と考えられます。また、埋土から出土した内耳鍋からこの溝跡が 16 世紀以降に埋没したことが分かりました。

このような方形にめぐる溝跡が面的に確認できた事例は、松本市内では数例にとどまり、旧波田町内では初めての発見となりました。

県内では、このような溝跡は 14～16 世紀の館や寺院を囲む「堀跡」として確認されています。現在本遺跡の発掘調査では、時期差はあるものの、溝で区画された内側から竪穴状遺構、掘立柱建物の柱穴の可能性のある土坑、内耳鍋などの生活道具を捨てた土坑、焼土跡などがみつかっており、さらに調査を進め各遺構の性格を把握することで、この溝で区画されたところがどのような場所であったかを明らかにしていきたいと思います。

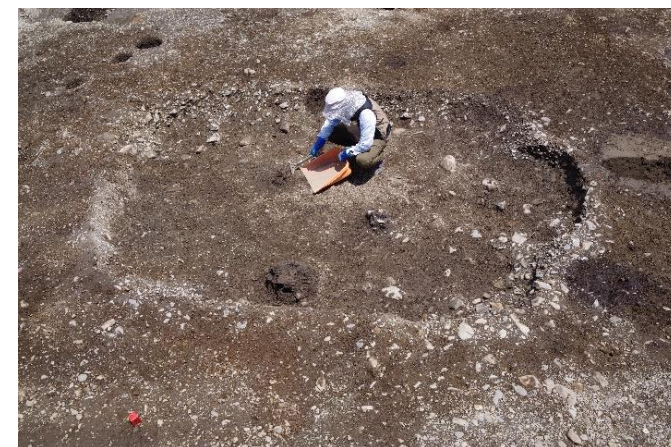
3 中世以降の真光寺遺跡

調査区北側では、方形に区画された溝跡(SD30)が埋まった後に水路として形成された溝跡(SD36)もみつかりました。和田堰に並行して東西方向に延びています。溝跡からは 17 世紀後半～18 世紀初め頃(近世)の陶磁器が出土しました。また、竪穴状遺構(SB05)では 18 世紀頃の陶磁器、轆の羽口、鉄製の「寛永通宝」(※江戸時代に広く流通した銭貨)などが出土し、近世後半に廃棄され埋没した遺構であることが分かりました。

これまで本調査でみつかった中世以降の遺構の時期は、埋土の違いや遺構の重なり合い、出土遺物などからいくつかの段階に分かれます。そして、時代によって居住域(竪穴状遺構／方形に区画された溝跡／現代の住宅)、墓域(火葬施設跡／円形の土葬墓)、生産域(現代の水田)など、中世から近世、そして現在へと土地利用を変えながら使われていたことがうかがえます。



溝跡（SD30） 東から



竪穴状遺構（SB05） 南から

真光寺遺跡遺構配置図(R3～6年度調査)



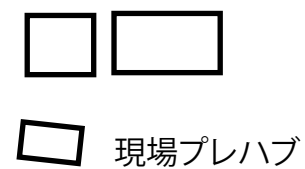
溝跡の検出状況 (中世～近代)



古墳 SM02 (7世紀後半～8世紀初頭)



古墳 SM01 (7世紀末～8世紀初頭)



SB05

SD36

SD30

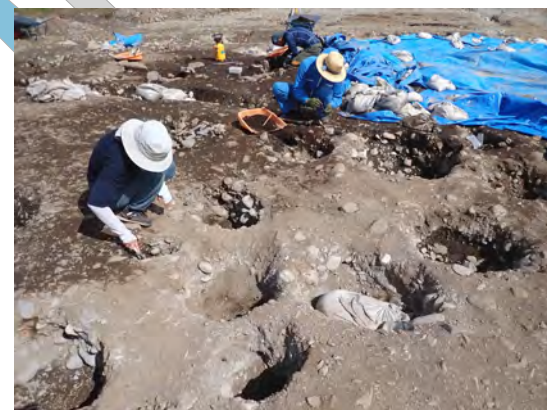
SM01

SM02

神林堰

現・真光寺お堂

石列 (16世紀頃)



円形の土葬墓 (15～16世紀頃)



火葬施設跡 (15～16世紀頃)

- 用地範囲
- R6年度調査範囲
- 松本市教委試掘調査

国道158号

